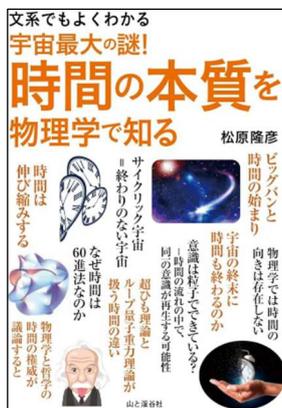


書評

文系でもよくわかる宇宙最大の謎！ 時間の本質を物理学で知る

著者 松原 隆彦

飯塚礼子（明星大学、日食情報センター）



松原 隆彦 著

山と溪谷社 / 208 ページ

本体 1,500 円 + 税 / 2023 年 9 月 19 日 発行

タイトルに「文系でもよくわかる」とあるので、どのような展開で物理学を通し時間の考え方を解き明かすのか、興味のある本であった。文中に数式は出てこない。この辺りは文系と自称する方々には、手に取りやすいだろう。さらに、順序立てて話が展開されており読みやすい。話の始まりは、「物理学」における時間の扱い方である。名だたる科学者が時間の観念をどのように扱ってきたのか、時間と言う座標軸をどこにおいて、考察してきたのかと言うことを数ページの読み切りとして書かれている。テーマごとに「まとめ」数行で掲載されているので振り返りができる。読みこなすためには基礎物理の知識が求められるであろうが、物理学に登場する文言については、身近な例として書かれているのでこれも解り易い。歴代の科学者がどのように時間を捉えてきたのか、宇宙の始まりと時間との係わりについて、想像しながら読み進めることができた。

物理学の時間の「はじまり」は、宇宙のはじまりと交えて考えることとなる。宇宙誕生から 1 プランク時間（これは本文で確認していただきたい。なにせ 10 のマイナス 44 乗秒である。）、とまかく途方もなく短い時間である。そこから話題のインフレーション、ビックバン、宇宙の広がり、宇宙の構造、ブラックホール、ダークマター、ダークエネルギーへと話は展開していき、わくわくしながら読み進める。読む方へのアドバイスとしては、原子核の構造、素粒子について何となくご存知であれば、なお面白く読める。

さらに、時間は永遠であるのか。その時間を計る道具はどのように考えられてきたのか、なぜ時間は 10 進法ではないのか、など。歴史に照らし合わせて、人々が時を知る過程も読み取れる。

最後の章では、時間は宇宙とのかかわりが深いことをあらためて振り返る。宇宙が存在しているから時間も存在しており、我々は宇宙空間の中にいることを知る。この時間が今後どのような進むのか、終わりがあるのかについては、いくつかの理論を紹介してある。読み終えて時間の使い方を大事にしたいと考えた次第でもある。楽しくわかり易く読める本である。ぜひ物理学に興味が無くても読んでいただきたい 1 冊である。



飯塚 礼子